

境界集落の渡世

— 隅田荘真土村 —

- 一 はじめに
- 二 宗教集落から関所集落へ
- 三 隅田荘のなかで
- 四 膏薬と渡世商い
- 五 おわりに

論文要旨

隅田荘の東の境界であり、紀州の東端である真土は、中世社会の残存をどのように近世や近代にうけついでたのであろうか。中世の下級僧侶である聖たちが住んでいた宿と、近世の紀州藩が設営した関所集落とは街道が動いており、地理的な連続性はない。にもかかわらず、近世檀家制度が、近世「街道」集落の住民に真宗寺院を旦那寺に強要した結果、隅田の村落社会は、神社の祭礼などにおいて、真土を芸能に奉仕する村にしたてていった。かつて、これらの芸能は殿原たちが、交替で勤めていた

ものにすぎなかったものであるのだが、近世では真土だけの任務になってしまった。こうして、真土に対する不当なまなざしが、近世に成立した。もつとも、聖たちの伝えた膏薬の技術は、近世の真土の人々に受け継がれた。この村の近世的特産品として生産され、とくに紀伊半島の森林開発がすすむなかで、金物行商との組み合わせで各地の伐採従事者に浸透していった。こうして、境界の村は、外の世界とつながることで、旧荘園内部に、広い農地を所有するまでの経済力をもつようになっていった。

森 栗 茂 一

一 はじめに

隅田荘の研究は、殿原などの政治経済の動向を検討することが中心であることはいうまでもない。しかし、隅田荘の周辺に位置づけられ、なおかつ紀和国境に置かれた人々の歴史については、寛元二年(一二四四)の「奈良坂・清水坂両宿非人抗争」(『春日神社文書』)に「真土宿」が出てくることで知られているが、十分な記述もなければ、その生活史の姿を辿った研究例も知らない。にもかかわらず、このわずかな歴史の事実が曲解・誤解され、境界の地に住む人々に対する無理解が少なからず現代にまで残っている現実があるのではないか。

かかる問題の本質については、もう少し一般論として議論するべきであろうが、ここでは真土村の動向を、伝承的世界をもとに記述してみたいと思う。

このとき、明治一三年『隅田村村誌』(橋本市史「中巻、所収」)の真土村の項がもつとも有効であるが、これをもとに役場書記の中井信一氏(明治一九年八月一〇日生)が書き加えた『真土村誌』(私家版)には、

宝曆検地帳及ヒ ト称し来リシ広人通メ此地ヲ真土ト云フ
上夙村
本村諸書出

と記している。夙は宿のことであり、加勢田荘下夙村に対する上夙である。すでに『紀伊国名所図絵』にも「今、上夙村に岩坂とて海道に岩を敷る小坂あるを」とある。

その後、信一氏の子息の中井繁信氏によつて発刊された『真土の歴史』(平成六年刊、私家版)は、そうした境界性の記述を控えて、この紀和境界の風景に万葉の人々が思いをよせた和歌を丹念に記述している。また、境界の地であるがゆえに努力した池田清助立志伝や方言・伝説・俚謡なども記述されている。また、同氏は『てくころ文庫 4 万葉ゆかりの地をたずねて―橋本市内の万葉歌碑―』(橋本市文化財探訪テクコロジ―実行委員会、平成七年)の発刊に関わっておられる。

ここでは、中井父子が長年にわたつてまとめられた成果を活用しつつ、真土周辺の伝承をもとに論をすすめてみたい。

一一 宗教集落から関所集落へ

(一) 宗教集落と高野山

『紀伊続風土記』の「高野山部 禿法師」には、

古老伝に昔時大和待乳峠に二人ありて、弘法大師行化し、一人には膏葉の製法を授け諸人に此を売りて生涯を送るべしと命給ひければ今に彼所に其伝ありて待乳の膏葉を鬻ぐ。一人は高野山に召具給ひて金剛草履を作りて売らしめ給ふ。此党は夏冬となく頭巾を着す。

とある。頭巾を着した高野山の禿のなかの里法師が真土におり、弘法大師秘伝という膏葉を製造していたことは間違いない。

これにしたがつて、様々な念仏の宗教者が、この紀和国境に集まつて

きたらしい。同じ項に、

大和の待乳峠に住居せり。今に由緒のものあり(略)念仏の法を授給ひて阿弥号をも許し給ふ。其後日夜念仏懺悔して往生を祈りけるに、中頃明遍上人てふ念仏の知識蓮華谷に栖息し給ひければ彼人の法化に浴して後に蓮華谷三昧院の指令に随ひ奉る。

とある。この場合、阿弥号を持った念仏修行者が集まっていたらしいが、その基地から高野山下の蓮華谷に移動した人々もいたようであり、その指導者として明遍上人がいた。彼は、応保二年(一一六二)、一九歳にて蓮華谷に棲息し、修懺堂を建て念仏の行を兼修した「非事吏の濫觴」であるという。善光寺・四天王寺で源空に会い、専修念仏の行者となり、空阿と名乗ったという。

真土における時宗念仏行者の集まりは、

紀州より大和国に修行せしみぎり両国のさかい真土山にてよみ侍る

きのくにのさかいをしるか真土山 よしの川とも これよりさいふ

他阿

という歌が残されていることから理解できる。他阿(一二三七年〜一三一九年)は時宗僧の歌人で、一二七七年に一遍に帰依している。

さらには、渡辺広によれば、中世の真土峠の周辺に阿弥号を持つ念仏聖たちが止宿し、寛元二年(一二四四)三月陳状案(佐藤家文書)に大和真土の名があり、真土に近江法師を頭目とした集団がおり、本寺(興福寺)の支配下であると主張されている。

これらはすべて大和の真土山とあるが、実際に真土山は大和側にあり、

大和側の集落、五条市畑田の待乳山法幢院西福寺(真言宗)には約二〇

〇基の中世石塔群がある。なかに延徳二年(一四九〇)の六斎念仏供養碑や六面地藏石幢がある。西福寺には、昔は高野山から直接、住職が来ており、寺山や寺田があつて、住職一人くらいは雇えるくらいであつたが農地解放でなくなった。今は、無住である。

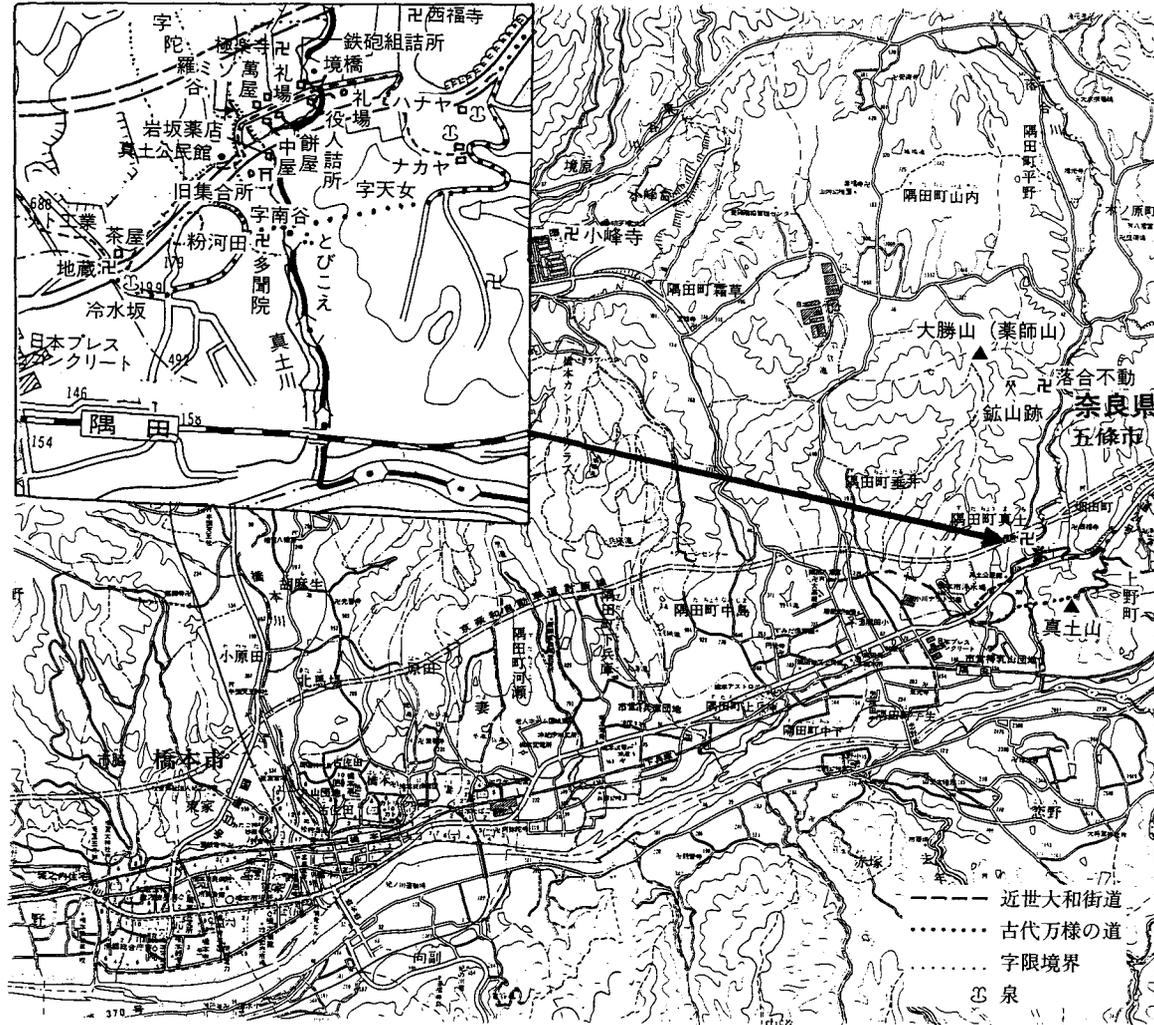
畑田は現在一二軒だが「畑田八軒」といって、昔から竹村三軒・平野二軒・岡本一軒・田中一軒・小池一軒である。なかでも、竹村寿之家は、代々庄屋で檀家総代であるが、大覚寺の立替えについて寄付をしたことが書いてある天正の文書があるという。また、竹村家には大日如来の分骨といわれる箱(四方に五体の仏を描く)が祀つてあり、宝暦の年号があるという(未確認)。

こうした聖の活動のうち、紀州側の動きについては、『隅田村村誌』(『橋本市史』中巻、六三二〜六三三頁)は、

古跡 多間院廃跡 (略) 古時釈空海高野山飛錫ノ際爰ニ休ヒ、懐病ノ者ヲ見テ之ヲ哀ミ一種ノ薬方ヲ教ヘ、売薬ノ利ヲシテ糊口ヲ凌カシム、是ヲ世ニ真土膏ト稱ス。

(略)其陀諸患ニ卓アル妙法ナリ、故ニ世々天刑病ノ者各地ヨリ此ニ集参シ居住セシガ、明治維新ノ頃より廃業シテ売薬ノミ村民ニ伝へ残レリ。

と伝えている。これは、現在の集落の中心部分である「街道」とよばれる集落(字垣内)から、かなり南に離れた山中の南谷にあつたといわれる。



彼らが壊病であったといわれることと、アカギレの膏藥を製造することとは無関係である。にもかかわらず、近代初頭において膏藥製造の伝説が、このように壊病と伝承され、近世に頭巾を着す党と理解されてきたのは、ほかでもない、これらの念仏系の聖の伝承に対する不当な見方によるのではなからうか。

しかし、そうした宗教色は、大和側の畑田村や真土村のはずれの南谷にみられるのであり、現在の真土の中心である街道集落にはそうしたものはみあたらない。

(二) 宗教集落と粉河寺

もう一点、真土と宗教との関わりでいえば、粉河寺の伝承もみすごすことはできない。

隅田町真土戸立の小越南方に、粉河田と名付けられている、約三〇アールの田地（現在国道二四号線の開通にあつて反別減少）がある。

寛平元年（八八九）秋のころだと伝えられる。夜半にこの田の稲を刈り取るものがあつたので、百姓がこれを見つけて矢を放つたところぱつと放つ不思議な光、驚いてよく見ると一匹の葦毛の馬である。百姓は恐ろしく逃げ帰って、翌朝その田に行ってみると馬の姿もその足跡もなく、ただ二・三束の稲が人が刈り取った様子であった。百姓たちはこの不思議な出来事を見守つたが、その年にはもう再びそのようなことはなかつたが、同じようなことが翌年も、その

翌年も三年ほど続いたので、百姓たちはこのたたりを恐れて、その田地を大和宇智郡大鳥郷逸多院の住職良心に寄進したのであつた。良心は事の実否を確かめようと、毎夜出かけてその正体をうかがつた。

ところがある夜のこと、墨染の衣を着た小僧が稲二束ばかりを担って帰る様子であつたので、良心は黙つてそのあとをつけていったが、小僧はひたむきに西へ西へと進んでいつこうにとまらない。一〇キロメートル余りも歩き続けたところ、彼の小僧は粉河寺の本堂の内陣に入つたので、良心はいよいよ驚いて寺院に入り、寺僧に事の次第を告げた。

寺僧も不思議に思い、本堂内陣を調べたところ、御帳の前に、うるおい新たな稲把二束が載せられてあつた。良心ますます不思議に思つたので、ここに参籠してその因縁を祈念したところ、先の小僧現れ「我は大悲の大将なり。汝は真言の行者なり。故に形を現わしてあらわれ、形を以て示す。国中の人を育むは我なり。我此寺に住して歳久し、彼田は国の一の坪なり、故に上分を苜召す。戸立の稲穂の珍しさには非ず。国中の人民を憐むが為なり」という。良心夢さめて感泣しながら寺院を退出したとのことである。（『粉河寺縁起』『橋本市史』下巻、六九六頁所収）

というものである。この結果、明治維新までは、この田から米三升を粉河寺へ寄進する慣例であつたという。粉河寺と真土との関わりについては、今後の課題とならう。

(三) 真言宗から真宗へ

真土村の西本願寺派極楽寺の本寺は紀州ではなく、なぜか大和国蘇我光専寺である。本堂の横に、薬師堂があり、薬師を本尊として右に十一面観音、左に毘沙門天が祀つてある。この三仏は、平野・山内、垂井・真土の境界にある大勝寺山大聖寺のものであり、江戸初期に住職の靈夢にあらわれて、村人が極楽寺境内に下ろしてきて祀つたという。『紀伊国名所図絵』によれば、極楽寺の前名は薬師寺というから、もともと山寺としての大聖寺と里寺としての薬師寺があつたのかもしれない。大勝山の南延長山麓、真土集落の後ろの山を、人々は薬師山と呼んでいる。

極楽寺境内には、中世作とおもわれる一七六センチメートルの宝篋印塔があり、小峰寺の宝篋印塔と並ぶものである。これも、大聖寺から村人が運んできたのだという。小峰寺と大勝山は峰つづきである。

問題は、中世の真土に真言的念仏行者がいたらしいのに、なにゆえ西本願寺派になつたかということである。近世檀家制度が、人々にそれを強要したのであるうが、村人の方では、この薬師信仰を捨てきれなかつたとみえて、薬師様を極楽寺まで運び、山を薬師山とよびならわしてきただのである。

(四) 関所集落への転換

真土では、「浅野の殿さんが検地をするときに、あまりにも民家のみすばらしかつたので十二軒を修理してくれた」と伝承されている。この経

過を『真土村誌』は

和国街道ニ縁テ列比スルモノ一二戸アリ、浅野幸長本国封土以来官費ヲ以テ□シ民家ヲ修理ス 即チ今宿ノ原因ナランカ 今ノ字垣ノ内ニアリ

と書いている。その十二軒とは、「街道」集落に近代まであつた日待講のメンバーであつた。その家とは

札場(屋号) 極楽寺前の交差点で、高札場があつた。高札場は、境端を渡つた畑田側の田のなかにもあつたらしく、「札場」とよばれる小さな区画の田があつた。

萬屋(屋号) ワラジなど旅の品物をいろいろ扱つていたのでこの名があるという。

餅屋(屋号) 旅人に餅を売つていたという。
中屋(屋号) 木賃宿であつたという。

のほかに、上野・堀川・岩城が各二軒、松下・池田が各一軒である。上野など八軒には屋号が伝わっていない。彼らは「街道」集落を横切る小さな溝より東、字垣内の内に集まっている。

また、浄土真宗西本願寺派真土山極楽寺には、紀州徳川の南龍公の位牌がある。なかなか立派なものであり、藩と真土村との特別の関係を思わせる。また、「街道」集落の南にそびえる戸立山には、南龍神社と称するものがまつられている。同様に、大和領の畑田の竹村家でも、紀州藩の殿さんを泊めたという伝承を持っている。

実際、「街道」集落には、「札場(屋号)」家が村の中心の極楽寺の門前

にあり高札場があった。東端の街道の両側には黒門関所があり、向かって右に役人詰所、左に鉄砲組詰所があったという。さらに大和側に三〇メートルほど入った右（南側）の街道沿いの田の一角が、大和側の「札場」とよばれている。

つまり、古代の真土山の峠越から紀和国境の「とびこえ」の岩渡りを越える道（地図中…）には、大和側にも、紀州側の南田にも、中世聖の宗教的な場所があった。また、別に地名から推測すれば、字陀羅田も聖と無関係ではないかもしれない。しかし、それと近世街道（地図中…）の藩行政の関所を置いた境界の村としての意味とは、場所を異にする。同じ真土といっても、中世の宗教集落と近世の「街道」集落とはつながらないのである。むしろ、近世の「街道」集落は、浅野の関所経営によって意図的につくられたものであった。

真土という地域が同じであるということ、そこに住む人々が系統をひくということとは、かならずしも一致しない。にもかかわらず、宿・夙ということばによつて、中世の人々と近世の人々が連続するがごとき誤解は、この際、訂正せねばならない。

それでは、この誤解は、近世の隅田荘ではどのように展開してきたのであろうか。次にみてみたい。

三 隅田荘のなかで

隅田八幡の祭（明治四〇年頃までは旧八月一五日であったが、現在は

十月十五日）には、隅田荘内から太鼓屋台がでることになっている。屋台は字ごとに計一三台あり、毎年各地区から一台づつ出ることになっている。地区は

山手地区（平野、山内、霜草、境原）

宮本地区（芋生、中下、垂井）

下手地区（中島、下兵庫、河瀬）

川南地区（恋野、赤塚、中道）

となっている。担ぎ手は五〇人の若連中である。境内に太鼓が入りお練りをして、正午に四台が揃う。その後、お囃子合戦をし、二時にお旅所まで渡御する。隅田家代表を先頭にしていたが、現在では各区区長と代理、約四〇人が薄水色の紋付に袴を着て、菅笠をつけて通る。続いて、

太鼓（榊・神興・宮司・楽人・御幣）・御幣1・大幟1・五鼻1・御榊2・大御幣3・鉾3・長刀2・弓2・矢2・太刀2・剣1・唐櫃1・太鼓1・獅子神楽1

の行列となる。（『紀の川流域の民俗』二五〜三一頁）

この屋台は近世に始まったものであるが、楽人の練りは中世に続くものである。文献による、楽人や猿楽・相撲・伶人などは、表のとおりである。

隅田・葛原家文書「隅田八幡宮放生会頭人差定」による頭一覽

文書番号	年	南庄分	御供頭	贅頭	猿楽頭	相撲頭	御酒頭	楽頭	四斗三百頭	伶人頭	舞童	流鏑馬
葛三三	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
葛三四	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
隅四三	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
隅四四	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
隅四八	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一三三五	不詳	南	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○ || 記述あり
 ⊕ || 田楽
 名字 || 地名に關係する姓
 || 記述なし

ここで注目すべきは、真土が屋台を出していない点である。真土は隅田荘の内でありながら、隅田八幡の祭礼においてはその外なのである。それではまったく隅田荘とは無関係かといえそうではない。

隅田八幡の祭礼や紀元節(二月十四日)・天長節(四月二十九日)・明治節(十一月三日)には、楽人としてお練りの最初を真土村の人々が歩いた。シヨウ・ヒチリキ・ホウテキ・大太鼓・横笛の五人を出したが、最近ではシヨウを演奏する北脇氏を中心にお練りの先頭を歩いていた。表によれば、中世では北荘のうち山内などの殿原や「大名」と称する人々がおこなっていた楽人を、近代では真土村の人々が独占的におこなっていた。

この楽人の役については、特定の家柄で決まっているわけではない。この役については、晴れがましいといった感じではなく、「真宗の村だから越天楽をやらせられるのかなあ」といった感じであった。戦後はやめて、テープ演奏となった。つまり、近世寺檀制のなかで真宗寺院地域にされた真土が、真宗寺院檀家であるがゆえに楽をさせられていると認識されているのである。

四 膏葉と渡世商い

(一) 膏葉

先に『紀伊続風土記』の「高野山部 禿法師」の項に、弘法大師から

膏薬の製法を教えられたという。この膏薬作りについては、「泣いている
 嬰兒を抱いている所へ弘法大師が来て、地面に杖を立てると水が湧きだ
 した。その水は乳のようであったという伝説があり、真土（待乳）の地
 名の由来としている」という伝説がある。（『和歌山の研究』一五九頁）
 『紀伊統風土記』には、

街道にある十四剣は万治年中（一六五八）より造らしめ給ふ所な
 りといふ。村の南端切通しをなし道を通す。是を戸立山といふ。村
 中に膏薬を売買す。不動石の辺巖下の清水を汲みて煉る。弘法の加
 持水といふ。

とある。一四軒というのは一二軒の誤りではないかと思うが、近世の膏
 薬製造販売を記述している。

山ノ井岩吉編『和歌山県業史刊行会』（一七四〜一七五頁）によれ
 ば、奈良県五条市上野の山形氏（現当主勇氏）の祖先が弘法大師から処
 方を授けられたといい、施業していた。「昔、乳の痛む婦人ありたま〜
 弘法大師が通られて松脂に種油をまぜて煮て膏薬とせよ」といわれ、実
 際にやってみるとこれにより快癒したとの話があり、後、あかぎれ薬に
 なったという。

山形勇氏家は、昔、真土峠で「四国まいりのような人（巡礼）が泊ま
 るようなハナヤという旅館」（木賃宿）をしていた。峠には別にナカヤと
 いう旅館もあった。旅館で膏薬を売っていた。ナカヤでも膏薬を売って
 いたらしい。当時の膏薬販売の看板は処分したのに、いまでも、自宅の
 前にバスが停まり、膏薬をほしいという人がやってくることもある。

峠の上は、字天女とよばれ浄善寺がある。ここの檀家である。また、
 ラジウム温泉タイヘイが現在も影響している。峠の上には、大師の杖の
 井戸といわれる井戸が湧いており、それを製造に利用した。現在の自宅
 の裏にも水が湧いている。そのため、自宅の仏壇の隣には、弘法大師の
 大きな祠と木像をお祀りしている。

昔は山仕事が多く、手があるもので、膏薬は必需品だった。秋から冬
 にかけて、自宅の軒下に外に作った竈に大きな特殊な鍋をしつらえ、松
 脂をゆつくりと炊く。沸かしておいて、少し冷ますような形で種油を入
 れる。また沸かしては種油を入れる。これを何度もくりかえす。朝七時
 から夕方四時まで、チヨロチヨロと炊いていた。煮詰めて、適当にまる
 めて、筍の皮で包んで各地に出荷した。戦前までであった。

同様のあかぎれ膏薬の製造販売は、真土村の岩坂三松氏も待乳膏とし
 て古くからおこなっていた。岩坂氏は戸立山の山際、近世の大和街道の
 戸立山の峠にあり、『紀伊国名所図絵』にいう「岩坂とて海道に岩を敷る
 小坂」の際にあった。

こうした膏薬の製造販売は真土では多くの人々がやっていたが、儲か
 る場合も多いらしく、隅田荘内の中下村の青木理助氏の祖先も天明年間
 から製造していたという。青木氏の場合は、明治初期に免許を受け、あ
 かぎれ膏薬ではなく「吸出膏」として広く九州方面まで販路を持つてい
 った。

青木家は代々理助を名乗っていた中下村の庄屋であった。中下村はみ
 な大高能寺の檀家であり、自宅には弘法大師から授けられた五帖があり、

青木家の一軒墓は大僧正の名があるという。しかし、文書類はすべて散逸し、現在隅田家文書に入っており、一部は県史に載っているという。

伝承に、かつて女兄弟が多くて、皆出家して尼となり、芋生・中島、それに上野の浄善寺に青木の位牌を持って出ていった。浄善寺の釣鐘には青木の名前があるという。上野の浄善寺といえ、先のハナヤ(山形氏)やナカヤが宿屋がてらに膏薬の製造販売をしていた字天女の真土峠にある。この関連で、薬製造を始めたのであろうか。

先の山形氏といいこの青木氏といい、真土峠にいた弘法大師に関係した一種の宗教的な(または宗教的立場を主張する)人々のなかに、この膏薬作りで成功した人々がいたのである。中下村の青木家の伝承によれば、昔、祖先が隅田川の岩倉池を作るおりに、世話頭をして苗字帯刀を許されたのだというが、その工事のときに、人夫の人々に膏薬をひろめたのだともいわれている。また別伝では、青木の祖先は疫病がはやったとおり、救済に他国へ出たともいわれている。

青木氏の製造販売していた「できもん」に効く吸出膏は「注下膏」(中下村をもじったか?)といわれ、そのいわれを書いた巻物がある。(現物未確認) その巻物には、ゴマ油をベースに四八種を二斗釜で炊いて、漉して、光明丹(鉛の粉)や松脂をいれて練り、それをハマグリの貝のなかにつめると製造法が記述してある。また、大阪から蟹の甲羅の黒焼を購入し、ハッソウ(蛇の骨)の粉を混ぜて、肺病やできもんを内部から治す飲み薬もいろいろ研究して作った。青木氏の商品は、紀ノ川筋の薬局は言うに及ばず北は北海道、青森、南は九州まで出荷された。昔は人

を使って作っており、行商の人も雇っていて、その得意先の帳簿類があった。

こうして薬で設けた青木氏の田地は広く、隣村へ行くのに他人の田を通らずともいけたとまでいわれる。

(二) 膏薬と商い

真土村の場合、村中に平田は少ない。慶長検地目録では村高一七九石余に対して、慶安四年(一六五二)上組在々田畑小物成控に、家数二七、一〇四人とあり、近世初期の生活は、大変苦しい状況であった。

ところが、明治頃までは隅田荘中心部の芋生より北、垂井や中島のあたりには、真土村住民所有の土地が多かったという。また、奈良県側の畑田にも入作していた。特に大地主が多いというわけではないが、平均して村外に多くの耕作田を持ち、場合によってはネング(小作料)をとって生活している者もいた。戦後の農地改革まで、北脇・琴谷・中谷・ヤブモト・西田などは村外に耕地を多く所有していた。このような資力はどのようにして手に入れたのであろうか。

それは、出稼ぎをしてよく働いたからである。吉野山中へ分け入り、鋸・鉦・包丁・鑿・鉋の新品を売ったり、そのアフターケアとして使い古された刃物を天秤棒で集めてきて、真土村で目立てや打ち直しをした。『隅田村村誌』(明治一三年)をみても、「五四戸のうち、医師一、商一、農商四六、鋸鍛冶二」とある。商とは、大阪や堺に働きに出た後、地元に戻って刃物を取り寄せていた問屋的な機能をした商店であろうか。

これに対して、農商四六という大人数は、農閑期に吉野の山中へ行商に出っていたのであろう。

記憶にある最近でも、数軒が尾鷲や新宮まで出掛けていた。目立てをした鋸などを郵便局止めで送り、(紀勢線がなかったので)和歌山からの船便で現地へいったという。とくに、瀬川のところの玉置山のお祭りには、多くの杣が集まるので、店を出して新品を売ったという。そして、刃先の切れ味の悪くなったのを集めて、自宅へ郵便で送った。村には鋸鍛冶が二軒古くからあったが、明治以降でも、川上村で山道具鍛冶の仕事を行ってきた人が、真土の村中でのいろいろな道具直しをしていた。この真土の鍛冶屋に、刃物をなおしてもらっていた。

こうして、刃の再生をした山道具を配るときに、山仕事でヒビ・アカギレができる人々に、真土膏薬を持って行って喜ばれたのである。

(三) 地質・地形と仕事

真土は、国境の傾斜地であり、耕地は少ない。しかし、地質の変換点であるのか、湧き水が豊かであった。その硬水を利用した、膏薬作りがあったのである。奈良県側には上野という地名があり、断層破砕帯におけるニューウ、すなわち丹(水銀)の生産の可能性がありそうだが、今後の課題であろう。

真土の北の薬師山は、ササユリが多く自生しており、粉河寺周辺と同様に、蛇紋岩地帯が北に延びてきている。ササユリ地帯には、銅などの複合鉱床の可能性があるが、大勝山のふもとで、何か掘っていた形跡が

あったという以外には、何も聞き出すことはできなかった。奈良県側の畑田村では、字樋の口のフケ田の所は、昔、鉄の掘った所だといわれており、金葉がでる。しかし、こうした点については、多くを聞き出すことはできなかった。

五 おわりに

水田を中心とした隅田荘の周辺に、街道の商売や硬水を生かした薬生産を持ちながら、吉野や大阪をにらんだ商売をしていた人々が、近世末から近代にかけて、隅田荘の中心部に多くの耕地を所有していたことは興味深い。

近世の隅田荘をみる場合、こうした境界集落の人々の経済力は無視できない。しかし、真宗檀家という立場が隅田荘のなかでは、なかなか微妙な点である。歴史的にも重要な意味を持つ谷間のこの美しい村も、今は京奈和高速道の予定地がせまっており、その景観も一変するものとおもわれる。

代々の役場の書記でもあった中谷氏は、村の万葉からの由緒ある歴史と、境界・真宗村であるがゆえの苦しい歴史、施い耕地のなかでの歴史を考えたとき、村が村としてなりたつていくために、京奈和道の予定地変更や、村景観の維持を主張したが、村内の大部分は諦めが強かったという。

周辺の台地の宅地開発がすすむなかで、この境界の村の人々の渡世の

努力は、単なる歴史のエピソードにしかならずなくなるのであろうか。境界の村に対する誤解を残したまま…。

参考文献

- 安藤精一編著『和歌山の研究5』清文堂出版。
斎藤和枝『紀の川流域の民俗』桜楓社、一九九二年。
中井繁信『真土の歴史』自費出版 一九九四年。

中井信一『真土村誌』大正頃刊 私家版。
橋本市文化財テクノロジー実行委員会

『てくころ文庫 vol.4 万葉ゆかりの地を尋ねて―橋本市内の万葉歌碑―』一九七五年

橋本市役所『橋本市史』中巻 一九七五年。

橋本市役所『橋本市史』下巻 一九七五年。

山ノ井岩吉編『和歌山県薬業史刊行会』昭和五五年 初田印刷株式会社

(大阪外国語大学外国語学部 国立歴史民俗博物館共同研究員)

The Lifestyle of a Border Hamlet:
People Who Lived on the Borders of the Suda Estate

MORIKURI Shigekazu

This paper discusses how Matsuchi, a hamlet located on the eastern border of the Suda estate and the easternmost edge of Kii province, passed on traditions of medieval times in the early-modern and modern periods.

In medieval Matsuchi there was a *shuku*, or dwelling quarters for *hijiri* (low-ranking Buddhist priests), but this place had no geographical continuity to the barrier-station settlement later set up by the Wakayama domain in the early-modern period, because the highway that passed by the *shuku* was different from the one running through the barrier station (*sekisho*). However, the early-modern *danka* system (requiring people to belong to a Buddhist temple) forced the Matsuchi residents to become parishioners of a local temple of the Shinshū sect. As a result, the Suda rural community made Matsuchi a special village assigned to provide theatrical performances at religious rituals. Earlier the performances had been conducted by turns by lay low-ranking officials, but in the early-modern period they became an obligation of the people of Matsuchi. In this way, discrimination against Matsuchi emerged at that time.

Techniques of making ointments and plasters were transmitted by the medieval *hijiri* priests to the people of Matsuchi, and these medical products became a local specialty, which were widely sold by itinerant tinkers as the forests in the Kii Peninsula were opened up to farming. By linking itself to the outside world in this manner, the border village came to possess a large expanse of farming land within the former Suda estate.